

『これからも大きく変わる京都の学校』

～奇跡と呼ばれた学校（堀川高校）の実践を踏まえて～

これはある研究会で2007年7月にお話した記録です

はじめに

今日は「これからも大きく変わる京都の学校」というテーマをいただきましたが、京都の高校教育について、最初に話題を呼んでいる堀川高校の校長である荒瀬克己さんの著書『奇跡と呼ばれた学校』の内容を紹介しながらお話をしたいと思っています。

京都市の公立高校である堀川高校が、京大・東大をはじめ関関同立など有名大学に数多くの進学者を送り出すような変貌を遂げた「堀川の奇跡」ともいえる状況がここ数年話題になっています。当初、私は堀川高校の奇跡といわれる進学実績について、市内の良い先生を集め、優秀な子どもたちを集めてスパルタ的な教育をやれば、それだけの成果が出て当たり前だと思っていました。

ところがこの本を読む中で、京都市教育委員会の基本姿勢に対する評価も少し変わるほどの認識を新たにしました。外からは京教組や市教組、市立高教組と京都市教育委員会が全面对決をしているように見えますが、門川教育長も堀川高校の荒瀬克己校長は市立高教組の副書記長の経歴を持つ元「組合の闘士」だったことを認めています。このことを見ても京都市教育委員会と市教組・市立高教組の関係は表面だけでは理解しきれない部分もあるということを知りました。

京都では、「公立はアカン」「公立高校は4年制、公立高校卒業して1年浪人しないと大学に入学できない」といったことが囁かれていて、「難関大学を目指すなら私立」という話を私も耳にしていました。

しかし堀川高校の改革後、今春のある新聞に「今春に公立高校を卒業した生徒の大学合格状況では、市立高校卒業生の国公立大学への現役合格率は17.8%、府立高校卒業生10.4%で共に過去最高となった。市立高校全9校の国公立大学の合格者345人の内、京都大学現役合格者数は堀川高校が35人で最多。嵯峨野17人、西京7人、洛北と桃山がそれぞれ3人と続いた。卒業生に占める京大合格者の割合は、堀川高校が14.1%で全国の公立高校で4年連続トップ」という記事が出ていました。

また、京都大学の前期～高校別合格者数をサンデー毎日が4月下旬号で紹介しているのですが、洛南がトップで、東大寺学園や洛星という有名私立学校のランク入りに続いて堀川高校が第10位に入っています。

2003年にも「京都市立高校の普通科でも03年度の大学現役合格実績が過去最高となった。現役合格率は、国公立大学、私立大学ともに上昇した」と書かれてありました。一方で、京都府立高校の衰退には歯止めがかからず、こうした事態の中で府立洛北高校での中高一貫校の再編構想などが急浮上しました。

(末尾資料①)

資料

2007年度 京都大学・前期～高校別合格者数 ベスト15

順位	昨年順位	合格数	(現役)	現役率	現役合格率	学校名 (●=私立、○=公立)
1	2	98	68	69%	13%	●洛南
2	4	79	60	76%	28%	●東大寺学園→現役合格率NO.1
3	1	75	53	71%	17%	●西大和学園
4	6	66	45	68%	20%	●洛星
5	5	62	41	66%	18%	●大阪星光学院
6	3	57	35	61%	17%	●甲陽学院
7	11	46	24	52%	6%	○膳所(滋賀)
8	9	45	26	57%	7%	○奈良(奈良)
9	14	43	20	49%	6%	○天王寺(大阪)
10	12	42	35	83%	14%	○堀川(京都)
11	10	40	21	55%	7%	○北野(大阪)
12	8	35	19	54%	6%	●清風南海
13	19	34	23	68%	9%	●高槻
14	7	32	18	56%	8%	●灘
15	16	31	26	84%	5%	●四天王寺→ 現役率NO.1
15	16	31	24	77%	8%	●智辯和歌山

1. 堀川高校の教育

堀川高校の実践をこの本の内容から紹介すると、「いい生徒を集めて、スパルタ教育でやれば進学率が上がるということではない」ということが書かれています。京都市立高校21世紀構想委員会の答申(1997. 12)に基づいて、堀川高校で校舎全面建替が実施されるとともに、人間探究科(文系)と自然探究科(理系)という新たな科目が開設されました。(1999. 4)外からの評価としては、「京都市立高校教員は全体で700人いるが、目立って優秀な人材が堀川高校に集められたわけではなく、何故ここまで変わったのか」あるいは「堀川高校でやっているシステムをそのまま導入したい」、さらには「堀川高校は公立だから異動もあるので、今の教員がいなくなれば元に戻ってしまうのではないか」という疑問も出されていましたが、実際にはそうなっていません。

荒瀬校長は「堀川高校の教育の神髄は二兎を追うことだ」と述べています。さらに「二兎どころか三兎も四兎も追いなさい」といっていますが、大学受験に必要な学力を身につけること、大学入学後の研究に向けた能力や姿勢を養うこと、自在に英語を話せること、大学入試の英語を解けること、知識習得型の学習と課題探究型の学習など、基本的には「よく学び・よく遊ぶ」という高校卒業時に自立できる青年を育成することを目標にして、「見える力と見えない力」をつけるという表現をされています。

そして、「見える、あるいは見えやすい力とは、数値化できる力のこと。つまり試験で測定できる知識の量的なものであり、見えないあるいは見えにくい力とは、数値化できない力のこと。例えば、判断力や企画力、実行力や行動力、持続力、想像力や愛情といった試験では測定しにくいもののこと。見え

るものを軽んじてはなりません、見えないものを大事にする」のが堀川の教育理念であると言っています。

探究科の授業の進行・管理は、生徒の探究委員会が行うことになっていますが、正直いって授業の進行と管理をかなりの部分生徒がやっていることに驚きました。もちろん先生から十分なアドバイスはあるのですが、1年生のクラスを5人ずつのグループに分けて論文に取り組むのです。その論文の発表は英語でおこない、グループ対抗のディベートもやります。また1年後期にはゼミ選択をして、個人研究のテーマを決めて2年生で個人研究をまとめるようにしていますが、その際には大学院生のティーチング・アシスタント（TA）制度も活用しています。

本の中では「赤土を用いた砒素の除去」というテーマについて、ある女生徒が研究した事例が紹介されています。バングラデシュの土壌には砒素が溶け出しているために地下水が飲めないのが、これをどう除去するか問題になっていましたが、砒素と同じリンを赤土が吸収することが分かり、しかも赤土は焼いても砒素を除去することが可能であることが分かったので赤土を焼くことを考えたのです。赤土を2時間かけて300度の熱で焼き、その焼いた入れ物で水を透過させると砒素が除去できるようでした。この生徒は、このバングラデシュの土壌汚染の問題に関心を持っていました。そして、2年生の夏休みの時間を全て使って、1日5時間、赤土を焼いては壊しての繰り返しで実験を進め、ついにその目的を達成する

に至ったそうです。その後、その研究発表をするとともに、探究基礎委員長として研究発表するためにアメリカにも渡っています。堀川高校ではこの生徒だけでなく、色々な研究テーマを自分で決めて打ち込むという取り組みを高校生レベルで行っているのです。生徒たちの研究室として「本能館」（元本能小学校）という拠点施設がありますが、これも他の公立高校にはない堀川高校独自のものです。

荒瀬校長は「生徒たちが大学を決めるときポイントは、そこで何が勉強できるのかということです。堀川高校には合格することだけを考えている生徒は余りいません」と強調していますが、東大に進学した生徒が帰ってきて「先生、東大って堀川と同じことをやってるで」と言ったそうです。人間探究科の中学生に向けた説明会パンフレットに掲載された生徒からのメッセージをみると、「正直いって授業がものすごく厳しい。予習・復習をしなかったら授業にはついていけないけど楽しい」と書いてあります。その他には「格段にレベルが上がります。特に探究科は並々ならぬ勉強量ですが、決して損はしないし、そういう気分にもなりません。むしろ楽しんでやっています」「毎日の予習・復習、宿題が大変ですが、授業は自由に質問ができたり、知らないことが分かったりして面白いです」といったメッセージが寄せられています。このような声は、探究科の生徒だけが特別に優秀で頑張っているということではなく、I類・II類の生徒たちもこういう感想を寄せています。（末尾資料②）

また、堀川高校は、文部科学省のスーパーサイエンス・ハイスクール指定校に認定されていて、年間1,500万円（5年間）の予算が支出されています。年間1,500万円の予算と大学院生のTAが配置されている、研究拠点を独自に持っているというのはかなり恵まれた環境であって、有名私立学校以上の水準を

確保しているといえます。全ての公立高校でこういう教育環境や教育実践が実現できれば誰も文句は言わないのですが、市立高校全体で見ると堀川はあきらかに恵まれています。しかし堀川高校のような授業内容についていける生徒が多数であれば良いのですが、これだけの取り組みをしようとしてもできない状況にある公立立高校があるのも事実です。

また、多くの中学校の生徒、親、あるいは教師の視点から堀川高校を見た場合は堀川を希望しても入れない生徒も多く、進路を考える上でどういう評価なのでしょう。もう1つの問題は、堀川高校の卒業生を受け入れた大学側はどうか、つまり学生がどのように伸びるのか、学業や研究への意欲や進路などに関する大学側の追跡の研究があつてしかるべきではないかと思ひます。

さらに京都の私立学校は進学重視の学校も多く、堀川高校に対抗してどう考えているのかという問題も興味があります。こうした問題は私の力量をこえることなので皆さんでお考えいただきたいと思ひます。

京都市教育委員会は堀川の定時制の廃止を2001年3月に強行しましたが、この定時制の廃止に関して、私は個人的な因縁もあります。私学に通っていた子どもが高校3年生の夏になって突然「定時制に行きたい」と言い始めたのです。その理由を問いただすと「勉強がしたい。あの学校は勉強する学校ではない」と言うのです。私は退学届けを出して、編入試験を受けさせ、朱雀高校3年に入学することになりました。私は山城高校定時制のPTA役員もやりましたが、当時、府立と市立の定時制のPTAの連絡協議会の場で、定時制廃止が話題になっていました。その時、堀川高校定時制の教頭が「定時制があると、夕方5時までの制限があるので全日制は思うような教育ができない」といった発言をしました。その話を聞いた時、私は「この人は教育委員会の手先か」と本当に怒りを感じました。定時制の教頭が定時制廃止の意見を言うのですから。その後、公立高校定時制が次々と廃止されていくことになったのです。

2. 各都府県の高校教育「改革」について

続いて、各都道府県の高校「改革」の動向について若干お話したいと思います。大阪では、府立天王寺高校が「進学公立トップ宣言」をしています。新聞紙上では「大阪府の天王寺高校が、東大と京大への進学者数を公立高校で全国トップクラスに引き上げる目標を掲げて、受験説明会などでPRを始めた。大阪府では4月から34年ぶりに公立高校の学区が9から4に再編され、より広い地域から生徒を集められるようになった。同校によると、5学区だった1973年以前には100人以上が東大と京大に進学していた。しかし、学区増で通学区域が狭くなったことなどもあり、2006年3月の合格者数は39人。岡校長は、「進学実績を強調することに校内でも議論があつたが、経済的に苦しい生徒でも最高学府に進学できる道を保証することが本校の伝統的な使命である」といいます。（末尾資料③）

この「経済的に苦しい生徒でも」という部分が気になりますが、有名大学への進学希望をもつお金がない家庭の子どもたちはどうするのか、公立が優秀な生徒を集めて有名大学への進学実績を確保する必要があるという主張には一理あつて、保護者の立場からすると「うちの子でも医者になれるのか」と

思うわけです。その意味で、教育とは一筋縄ではいかないものだと思います。

東京でも「都立復権」を掲げて、日比谷や八王子東、国立といった進学重点校では、難関大学合格者の向上を目的として、土曜授業の展開、補習講習の実施、難関大学突破を意識した授業などが行われています。指定された学校は軒並み進学実績を上げており、それまで私立に流れていた層が都立に戻ってくる現象、都立回帰が起きているほどです。今春、1974年以来33年ぶりに東大合格者数が20人を超えた名門日比谷高校では、「今年は学区撤廃後の2年目で、全都から受験生が集まり出した学年です。進学重点校としての改革が実を結びました」（週刊朝日）」と紹介されています。

学区を広げて優秀な生徒をできるだけ集めて教育すれば、有名大学に多く合格するということになるわけです。だから今、学区を広げることが共通の「高校教育改革」の目玉になっています。この点では京都もそういう流れにあって、そのことは保護者の期待する側面もあり、単純に「高校間格差を広げるから反対」という主張をしても簡単に市民には受け入れられないし、現にそうした大きな運動がおきているわけでもありません。

現場の教職員の悩みもよく分かるし、生徒や親の気持ちも分かるのですが、教育環境の抜本的改善や学閥社会の是正、卒業後の職業・生活保障などの社会的問題解決抜きに今の矛盾が解決するわけではありません。

3. 階層化日本と教育危機

東大の荻谷剛彦氏が「階層化日本と教育危機」というユニークな本を2001年に出しています。日教組に対する批判や同和教育に対する批判も書かれてありますが、階層化が進む日本の現状について「どのような家庭的背景の子どもが学ぶ意味を見つけにくくしているのか、どのような社会的カテゴリーに属する子どもの（勉強への）動機づけが弱くなったのか」という問題である。ここには教育というスクリーンに投影された階層化する日本社会の変貌が映し出されている。誰もが同じように学習の意欲を失っているのではなく、それが特定のカテゴリーの子どもに顕著な現象だとすれば、学習意欲の低下は格差の拡大を伴って進んでいることになる。そうだとすれば、教育の場に現れるこうした『見過ごされた』階層格差の拡大は、日本社会にいかなる影響を及ぼすのだろうか」と書いています。

さらに「新しい学力観の提唱は、試験で測られる成績のように学業達成のゴールが単純であったものから子どもの意欲・興味・関心、さらには問題発見・問題解決というふうには、学業達成の意味や評価が評価の基準を以前にも増して複雑かつ主観的なものへとシフトさせる。このような変化の中で、家庭での文化的な資源の差が以前よりもものをいうようになる」と予想されるており、「戦後教育の中で、高度成長の30年間は世代が若くなるほど中学時代の成績は親の職業や学歴とは別の要因、つまり本人の能力や努力などによって左右される度合いが高まっていく、いわば平等社会というのが生まれた」と戦後教育をふりかえています。

また荻谷氏は、高知県の例を紹介していますが、これは京都にも当てはまるどころがあります。「高

知県では高校全入をいち早く実現した。中学校はもちろん高等学校も入学試験はありませんが、ただし私立高校があるために、私立が試験をやっている生徒を集めます。だから私立学校はますますいい生徒が集まるが、地方の学校ではいい生徒が集まらなくて困っている」（『日本の教育』日教組の教研集会のレポート集より）と1952年頃の高知の問題点を指摘しています。そして仮説として、「小学区制が理想視される陰で、高校レベルでの学校選択を許さないこの制度は、いい生徒たちを私立学校へと誘う。さらに、小学区制ほどではないにしても、公立高校の選択の幅を狭める学校群などの総合選抜制度もまた、その意図とは別に同じような影響力を持っていたと考えることができる。そうだとすれば、公立高校間の格差是正策は『思わざる結果』を生み出したのではないか」というとともに、「公立高校間の格差是正は、結果的にそれぞれの高校内での学力格差を拡大した。いい生徒が私立学校に逃げるというブライト・フライトが生じ、私立学校からの高偏差値大学への進学がより有利になった。その結果、私立学校への入学機会が社会階層との関係を強めていった」と指摘、ゆとりの問題に関わっては、「学校が教える勉強量が減った時、どのような階層の子どもが有利になり、誰が不利になるのか。教科や進路の選択を個人任せにした時、誰が得をして、誰が損をするのか。家庭での学習時間の階層差が拡大している事実にも照らしても、自由と引き換えに、階層間の教育格差が広がる可能性は否定できない」といいます。

この本にはクロス集計なども含めて、きちんとしたデータが出ていますので、非常に参考になります。たとえば、社会階層グループ別の学校外での学習時間については（自宅や塾）、下位、中位、上位で1979年と1997年の状況を比較しています。その比較では、上位もかなり減っていますが、下位の階層グループの学校外での学習時間の減り方のほうがかなり激しくなっています。（末尾資料④）

もう1つは、「落第しない程度の成績を取っていればいいと思う」子どもたちの割合について、これも1979年と1997年の母親の学歴で見ると、母親の最終学歴が中卒である子どもたちは、1997年には「適当に」という子どもたちが全般的に増えています。しかし、母親が四大卒の家庭は比率が低くほとんど変化がありません。こういう階層のグラフが紹介されているのですが、その解決策を荊谷氏は自らの考えとして示しています。解決策については色々な意見があると思いますが、教育に対する分析の見方は有意義なものではないかということです。

特にこれからは、フリーターやパート、派遣の若者が30代4代になって親になっていきますが、そういう階層格差の中でこれから10年先、20年先にそうした家庭の子どもたちの教育がどうなるかという問題は、考慮に値する研究ではないかと思います。

京都でもある私立大学が附属小学校を創ったときの個人面談において、「この学校は所得が1,500万円以下では無理ですよ」という話があったそうです。確かに大学の附属小学校はいくつもあります。私立大学の設置した附属小学校のそういう状況については問題があると思いますが、現にそういう学校を求めている層が今の社会には存在するのも事実なので、そこのところは教育を問題にすると、複雑な要素が絡み合っているのだと思います。

4. 京都の高校教育の現場～階層化する公立高校と現場の苦悩と健闘～

京都の高校教育の現場でも、大阪や東京と同様の現象が起こっています。山城地域の高校入試制度は2004年に山城北通学圏と山城南通学圏が統合されて、府立12の高等学校が単一通学圏の広域学区となって各校単独選抜に変わりました。単独選抜は校区全体から生徒を集めることができる制度で、優秀な生徒を集めることや、スポーツの得意な生徒を集めるために学校の特色を出すこともできます。しかし、生徒のほうでもいわゆる「学校評価」(序列化)に基づく選別の作用が働き、いわゆる受験校や「底辺校」といった序列化は避けられません。ある学校の資料ですが、最近の入学してきた1年生が進級の時期になると2～3割をこえる生徒が退学・転学(私学への)や原級留置となる数字が報告されています。つまり、不本意入学や目的を持って高校生活を送ることが困難な生徒が多い高校は入学当初から大変な状況にあり、地域や家庭の状況から見ても先生たちの努力も限界です。また遠距離通学で大変時間がかかります。京都市内のように地下鉄やバスがあればよいのですが、クラブ活動もしている生徒たちも大変です。どうしても救えない生徒が出てくると先生たちは嘆いておられます。学校の責任とだけ言い切れない実態がここにあります。

次に、京都市内と乙訓地域を合わせて、東西南北の4通学圏ありますが、今これを2つに統合する検討案が進んでいます。東京や大阪のように広域通学圏から優秀な生徒を集めて、特別な学校をつくるという方向に京都府教育委員会も京都市教育委員会も足を踏み出そうとしています。教育行政がこの考え方を持っているのは確かですが、これは必ずしもいい結果を招かないと思います。

ここでもう一つの実践を見ていただきたいのですが、府立朱雀高校は、京都市北通学圏6校(朱雀、北嵯峨、嵯峨野、山城、紫野、堀川)の中で、最低ランクに位置付けられている学校だといわれています。多くの生徒が朱雀高校に行きたくない理由としてあげるのは、校舎の老朽化が激しいことや朱雀の教育では大学進学が出来ないという点です。挙句の果ては、暴走族の巣窟で恐ろしい学校だというデタラメな噂まで流布されていました。

しかし、朱雀高校で生徒を伸ばすための教育が行われて、どう変わったかというレポートがあります。私が一番納得したことは、学力をどう伸ばすのかということについて、教職員組合の先生たちが中心になって校内に「学力問題専門部会」を設置し、真剣な議論をはじめたことです。生徒たちに本当の学力をつけて、大学に進学させようということで、授業の内容改善や学習プランも立てて生徒にやる気を起こさせたということです。「朱雀高校の3年間の学習プラン」で、何年で授業がどうなって、どこからどういう段階でどうなるかというのを生徒に示したということです。この本には、朱雀高校の教育実践として、毎年どのような授業をして、その内容はどうだったのか、その分析がかなり詳しく書かれています。朱雀の先生の話では、この「学んで、挑んで、未来を拓こう」という学習プランの冊子が中学校の間で評判になり、この冊子を通学圏の中学校3年生全員に配っているとのこと。

先生方の授業充実の努力によって生徒は成長していきますが、新入生は入学してまず茶髪の高校生にびっくりするのですが、その茶髪の先輩たちが真面目に勉強をしていることにさらに驚かされるわけで

す。堀川高校と朱雀高校は上と下の両極と言われていますが、朱雀高校では先生が頑張っていて生徒の学力をつけるためにも、生徒の生活スタイルも変えなければいけないと、「学習と生活と体について」実態調査をおこない、家庭での生活もどう変えるか、生活指導も含めて生徒たちとの個別の話合いのなかで改善をすすめています。

それからもう1つ、生徒に教職員のアンケートを取って改善を図ったということです。これは生徒が先生に文句を言うためではなく、どの先生の授業はどのように変えてほしいかといった具体的問題点を明らかにして、授業に反映するシステムを作ったのです。最初は先生たちの中でも「これ以上何をどうせよというのか」といった反発もあったということですが、進めていく中で生徒にしてみたら自分たちの主張によって、先生が授業内容や教え方を改善してくれることに生徒の満足度もあがって、学習に対してすごく積極的になるという変化が生まれた。そのような取り組みが保護者にも伝わる中で、保護者も家庭での教育を含めて学校を支えるようになったということです。

朱雀高校生の声を末尾資料⑤に上げておきました。「私の周りで朱雀は悪評だったので、最初は嫌でした。でも、今では朱雀で良かったと思えます。先生方は個性的な方ばかりで、授業も分かり易く楽しいし、他校にない、類型とは関係ないクラス構成が新鮮で、とても楽しいです。文化祭の模擬店等は先輩たちのがんばりで実現したそうで、生徒の意見がすごく反映されているのを実感しました。

他にもいい所は沢山あります！絶対楽しいので、ぜひ朱雀に来てこの楽しさを味わってください！！」朱雀高校の卒業式には保護者の方がたくさん参加されるということです。普通は卒業生が150人だったら保護者も100人から150人程度参加されることになるかと思いますが、朱雀高校の卒業式には600人以上の保護者の方々が参加されるそうです。自分の子どもが学んできた学校を最後に見てみたいと、お父さんお母さん、お祖父ちゃんお祖母ちゃん、さらには兄弟・姉妹まで来るそうです。子どもが本当に変わったということを実感できるという点で、朱雀高校の先生たちは胸を張っています。これまで世間の評価では「最低の学校」と言われてきた学校が、生徒と先生、さらには地域の努力でそこまで変わることが出来たのです。

京都府教育委員会も、そのことについて一定の評価はしているようで、今までのように組合員である教員を一方的に移動させるようなことは少なくなり、現場教職員の努力を認めるようにもなってきています。

5. 教育改革をどのように進めるのか

最後に今後の教育改革の問題についてお話したいと思います。広域通学圏で競争して、私立にも負けない優秀な学校をつくる一方で底辺校ができてしまう仕組みの問題と、その根底にある家庭階層が全く違うという日本社会の格差拡大の問題にどう対応するかということを考える必要があります。

その中で、京都市の同和教育は特別な問題があります。私の以前住んでいた家は東山区の同和校の学区でしたが、夏休みになると小学校の先生が、連日朝9時半頃から地域の学習センターで同和地区の子

どもを集めて勉強を教えていました。私は「先生、うちの子にも教えてくださいよ。両親共働きで大変なんです」とお願いすると、「あなたのところは家庭で面倒をみて下さい」といった返答が返ってきました。

このように、京都では長年にわたって偏向的な同和教育がおこなわれています。

また、弥栄中学校の学級編成は、1年生が32人、2年生が34人、3年生が32人とそれぞれの学年で一つだけのクラスで構成されていますが、そこに担任と副担任、さらには副々担任まで配置されています。しかも実際には34人のクラスが、12人、11人、11人と3クラスに分けられているという極端な小人数教育を実施しています。上京区の嘉楽中学でも同様の措置が取られていますが、1人の先生が12人だけを教えるので、生徒に対して細かな目配りはできますが、一方で生徒数の多い「マンモス校」には定数の範囲内でしか先生が配置されないという問題があります。同和教育だけでなく、親の生活環境・教育力も地域ごとに違って、学校教育はこうした条件に大きく左右されます。教育とはどれだけ力を投入しても十分ということはなく、その意味では「同和校」であるからといった表面的な一面だけを見た議論ではなく、相当きめ細かな注意と対策が必要であることが分かります。

住民との協同で教育改革をどう進めるかという問題もあります。教職員集団と教行政はどこまでも対立するというか、溝が埋まらないところがあります。それは、国の行政が30人学級実現など教育環境整備を放置したままで逆に教員の適格性について「試験」をするという管理強化を一層強める方向性を打ち出していますが、地方教育行政が独自性を確立し、学校教育の現場に立って本来の教育のあり方を推進していく姿勢に立つことができていないからです。

そして私立と公立の矛盾も客観的にあると思います。愛知県は私学の比重が大きな地域ですが、愛知私教連では地域住民と共同した教育集会など独自の取り組みを大きな規模で展開しています。私立学校の教育は教育委員会の所管ではないこともあり、独自性が強調されるのですが、親の願いは「公立か私立か」の選択で微妙な問題を迫られるのではないのでしょうか。

現代社会において、父母や生徒自身の要求、企業社会の要求や派遣やパートなど非正規労働者の要求の問題など、社会をめぐる様々な問題を一つ一つ解きほぐさないと、教育の問題は共通の土台にさえ乗ることができない状況にあります。教職員と一緒に何かやろうかという保護者の方々にも教研集会などに参加していただくには、どうすればいいのか、そういう努力を一つ一つ積み重ねていく以外に問題の解決はできないし、京都だけでも教育をめぐる問題の解決は出来ません。また公立だけで問題が解決できるわけではなく、公立と私立の関係者が色々な形で協同の場を作ることによって問題の解決を図っていくことができるのではないのでしょうか。

今一つ問題なのは、大学の先生方と高校との連携が十分でないことです。大学の先生といえば修士課程や博士課程を終えた方々なので、落ちこぼれの気持ちなんて元々分かるはずがないと言ってしまうと言い過ぎかもしれませんが、もっと高校教育の現場の実態をつかみ、色々な意味での努力をお互いがすることなしに、高校教育の問題に迫ることはできないと思っています。これからのそれぞれの分野での

連携と討論の場がもたれることを期待して、私からの問題提起をこれで終わらせていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

<資料集>

資料① 2003年度 京都市立高校、普通科でも進学率過去最高

専門学科の大躍進で賞賛の声が上がった京都市立高校で、普通科でも2003年度の大学現役合格実績が過去最高となったことがわかった。現役合格率は、左図の通り、国公立大学、私立大学ともに上昇した。

一方、京都府立高校では衰退に歯止めがかからない。

公立高校普通科の大学現役合格率 (03年度単位%)				
	国公立	前年比	私立	前年比
市立高普通科	15.4	+0.6	41.5	+2.6
(参考)府立高	7.9	-0.1	37	0

資料② 堀川高校生からのメッセージ

「人間探究科／自然探究科」説明会 2006/8/26 説明会資料より

8期生からのメッセージ ※ このメッセージ文は、入学後1ヶ月ほど経て中学の先生方に宛てたものです。それぞれの文章末の(A)～(C)は出身中学の所在地域を表します。

(A) 京都市より北の地域 (B) 京都市 (C) 京都市より南の地域

1 堀川高校に入学して

☆ 驚いたことは、リーダーとかの係を決める時に何人もの人が立候補したことです。中学との、自主や雰囲気の違いを思い知りました。(B)

☆ 正直めっちゃしんどいけど、充実しています。この高校は「自分のことは自分です」という方針なので、何かのイベントの予定を立てるのもすべて生徒中心なのが、大変だけど意見を出し合い、協力しあっているいろんなことに取り組んでいます。(C)

☆ 一日一日がすごく充実しています。一日にすることがたくさんあって忙しいけれど、一日を終えたときにはとても達成感があります。(C)

☆ 周りの人がみんな真面目で、テスト、授業などいつも真剣な感じですが、でも、花背の宿泊学習や休み時間などで遊べる時は思いっきり楽しめます。メリハリがついていて過ごしやすい学校です。
(B)

☆ とにかく全員の意識が高いことをとても感じます。休み時間とかはけっこう皆で騒いだりもして

いるのですが、勉強する時は全員がとても集中します。(B)

☆ 楽しいです。特に厳しい校則もなく、とても自由な校風なのですが、別にみんな気がゆるんでい
るわけでもなく、しっかりと学習しています。(B)

2 高校での勉強は

☆ 格段にレベルが上がります。正直いっぱいいっぱいです。特に探究科は並々ならぬ勉強量です。
でも決して損はしないし、そういう気分にもなりません。むしろ楽しんでやっているという感じ
です。(B)

☆ 内容が難しく、常に考える事を要求され、スピードも速く結構大変です。でも授業の内容は興味
あることばかりで、楽しく授業は受けられます。(C)

☆ 宿題、予習、復習が毎日大変です。でも、授業は自由に質問できたり、知らないことがわかった
りして面白いです。(B)

☆ テストがいっぱいあって、周りのレベルも高いので大変ですが、その分常に高いモチベーション
で頑張れます。(B)

☆ とにかく課題が多いです。テストも毎週あるし、一度サボりだすと、大変なことになります。少
しずつでも積み重ねることが大切だと思います。(B)

☆ 宿題が多くて大変です。でも自分に生活リズムを調整したらついていけました。進度も中学校に
比べると、かなり速いです。だけど、先生方はみんな熱く教えてくださるので、わからないこと
もすぐ解決できます。(B)

3 校舎や設備は

☆ 勉強に関しての設備はほぼそろっているのではないかと思います。パソコンはあらゆる場所に設
けられているし、図書館の本も多いです。探究の授業で必要になる、普通の学校にはない専門的
な機械までそろっています。校舎もすごくきれいです。(B)

☆ 校舎は学校と思えないほどきれいです。教室には冷暖房が完備されていて、快適です。
毎日通いたくなる学校だと思います。(C)

☆ 生徒全員にメール・アドレスがもらえます。(B)

資料③

大阪府立天王寺高校：「進学公立トップ」宣言 東大・京大へ50人以上、目標に！

大阪府立天王寺高校が、東大と京大への進学者数を公立高校で全国トップクラスに引き上げる目標
を掲げ、受験説明会などでPRを始めた。近くホームページにも掲載する。

成績優秀な生徒を集めて公立復権につなげるのが狙い。

同府では、4月から34年ぶりに公立高校の学区（通学区域）が「9」から「4」に再編され、より広い地域から生徒を集められるようになった。同校によると、5学区だった1973年以前には、100人以上が東大と京大に進学していた。しかし、学区増で通学区域が狭くなったことなどもあり、06年3月の合格者は39人。岡校長は「進学実績を強調することに校内で議論もあったが、経済的に苦しい生徒でも最高学府に進学できる道を保障することが、本校の伝統的な使命。分かりやすい提示が必要と判断した」と話す。毎日新聞 2007年3月17日夕刊

東京都では、「都立復権」を掲げ、都立上位校を「進学重点校」に

日比谷や西、八王子東や国立などの進学重点校では、難関大学合格者の向上が目的であり、土曜授業の展開、補習講習の実施、難関大突破を意識した授業などが行われています。指定された学校は軒並み進学実績を上げており、それまで私立に流れていた層が都立に戻ってくる現象、都立回帰が起きているほどです。

今春、1974年以来33年ぶりに、東大合格者が20人を越えた、名門・日比谷高校では進学重点校に指定された成果を次のように語っています。「今年は学区撤廃後の2年目で、全都から受験生が集まり出した学年です。進学重点校としての改革が実を結びました」（日比谷高校副校長）2007.3.23 『週刊朝日』より

資料④「階層化に本と教育危機」（荻谷剛彦著）

「新しい学力観」の提唱は、試験で測られる成績のように学業達成のゴールが単純であったものから、子どもの意欲・興味・関心、さらには「問題発見・問題解決」というように、学業達成の意味や評価の基準を以前にも増して複雑かつ主観的なものへとシフトさせる。このような変化のなかで、家庭での文化的な資源の差が以前よりもものをいうようになると予想される

世代が若くなるほど中学時代の成績は親の職業や学歴とはべつの要因（本人の能力や努力など）によって左右される度合いが高まっていく。

「高知県では中学校はもちろん高等学校も入学試験はありませんが、併し私立学校があるために、私立学校が試験をやっている生徒を集めます。だから私立学校はますますいい生徒が集まるが、中学校、高等学校の地方の学校ではいい生徒が集まらなくて困っている。」（「日本の教育」1952）

小学区制が理想視される陰で、高校レベルでの学校選択を許さないこの制度は、「いい生徒」たちを私立学校へと誘う。さらに、小学区制ほどではないにしても、公立高校の選択の幅を狭める学校群などの総合選抜制度もまた、その意図とは別に、同じような影響力をもっていたと考えることができる。そうだとすれば、公立高校間の格差是正策は、以下のような「思わざる結果」を生み出したのではないか。それを仮説として示しておこう。

- ①公立高校間の格差是正は、結果的にそれぞれの高校内での学力格差を拡大した。
- ②「いい生徒」が私立学校に逃げるという「ブライト・フライト」が生じ、私立学校からの高偏差値大学への進学がより有利になった。
- ③その結果、私立学校への入学機会が、社会階層との関係を強めていった。

学校が教える勉強量が減ったとき、どのような階層の子どもが有利になり、だれが不利になるのか。教科や進路の選択を個人まかせにしたとき、だれが得をし、だれが損をするのか。家庭での学習時間の階層差が拡大している事実にも照らしても、自由と引き換えに、階層間の教育格差が広がる可能性は否
定できない。

母の学歴別 校外学習時間の変化（単位：分） （父の学歴別調査も同傾向を示している）			
母の学歴	1979年	1997年	20年間の差
大 学	123.2	106.3	16.9
短大専門学校	124.9	85.4	39.5
高 校	102.6	63.8	38.9
中学校	86.5	27.4	59.1

資料⑤朱雀高校の生徒たちの声（感想文や卒業文集より）

- ◆ 私は朱雀高校に入って一番驚いていたことは、生徒一人一人がすべての行事において、一生懸命がんばっていたということです。特に3年の文化祭の演劇の準備の時、一人一人が自分達の役割をまじめに取り組んでいる姿を見て感心しました。今まで、こんなにも一人一人が頑張っている姿に取り組んでいる姿を見たことがなかったので、この高校に入るととても驚きました。
- ◆ 私の周りで朱雀は悪評だったので、最初は嫌でした。でも、今では朱雀で良かったと思えます。先生方は個性的な方ばかりで、授業も分かり易く楽しいし、他校にない、類型とは関係ないクラス構成が新鮮で、とても楽しいです。文化祭の模擬店等は先輩たちのがんばりで実現したそうで、生徒の意見がすごく反映されているのを実感しました。他にもいい所は沢山あります！絶対楽しいので、ぜひ朱雀に来てこの楽しさを味わってください！！
- ◆ 夏休みに、先生主導でなく自分たちだけで演劇の練習計画、大道具も自分たち自身で考えて協力して楽しむ大切さを学びました。学習ももちろんですが、朱雀高校は自ら考え、行動する大切さを学べる数少ない学校だと思います。

学習に対する生徒の声〔感想文や卒業文集から〕

- ◆ 朱雀という高校は、みんなが楽しんで学校に来ているように見えます。楽しんで来ると、自然に姿勢が前向きになり、体が多くのものを学ぼう、吸収しようとするようになる気がします。そういった意味で、多くの事を学べたと思います。授業を通して学んだ事はというと、社会に出ていく上で必要になる知識－本当に必要かどうかは社会に出ていないのでわからないが－を学べたと思います。実験や課外授業も多く、ただ言葉を聞いて機械的に憶えるのではなく、実際に体感して学べたのでその分、自然に理解でき、体に入っていくように感じました。
- ◇ 朱雀高校の先生方は、皆とても親しみやすく、困った時は頼りになる方たちばかりです。そんな先生方の授業は、私たちの印象に残るように、授業にあった楽しい話もいれながら進めてくれます。私は朱雀高校で、今の仲間と一緒に毎日楽しく学べて最高だと言い切れます。
- ◇ 私には中学校の頃からずっと苦手としていた教科がありました。だけど、高校で出会った先生に「テストの点が取れないから苦手で、点さえ取ればその教科を好きという考え方はやめたほうがいい。その教科の本質を見抜け。」と言ってもらいました。それから、私は、どの教科に対しても先入観をもたず積極的に学んでいこうとしました。朱雀高校に来て、こんな先生と出会い、朱雀で勉強することができ、本当によかったです。みなさんもステキな先生と出会い、存分に学んで下さい。
- ◆ 私は、朱雀高校の授業中にみんながあんまり喋らなくて、寝る人も少ないことに驚きました。中学の時は、もっと騒がしくて、寝ている人も多く、先生もたまに困っていたけど、高校になって、先生がとてもきびしいというわけでもないのに、喋ったりする人はほとんどいなくて、3年の授業では、私の講座ではほんとに静かで、授業中は喋る人が全くいなくて、みんな授業に集中し、黒板に書いてあること以外に先生が言われることをメモに取っている人も多く、みんな成長したと思いました。
- ◇ 高校に入り、勉強していく中で、気になる事や疑問などが、私の中で出てきた。これには自分でもびっくりした。まさか、社会の事で興味を持つ事があるとは思わなかった。